

英語教育における社会言語学の役割 —シラバス作成の研究を中心として—

広島大学

西 田 正

序 論

社会言語学と英語教育は、それぞれ個有の目的意識を持ちながら、「言語使用」という共通な基盤に脚っている。社会言語学は、言語使用の諸事象を記述し、その法則性を発見することが主たる研究の目的である。一方、英語教育は英語と呼ぶ個別言語の使用を通じて、英語の使用者を養成している。両者の間にこの「言語使用」の共通基盤が存在する限り、英語教育は社会言語学から種々の impact を受けて変容しようと考えられる。communicative competence が英語教育全体の方向づけに寄与したり、speech acts, rolerelationships などが英語教授・学習形態の改善に関わりを持ちたり、社会言語学の影響は無視できない。

本論では、Wilkins (1976), van Ek (1977), Munby (1978) で示されたシラバス作成の研究を構成と内容から具体的に検討し、シラバスに及ぼす社会言語学の影響を考察する。加えて、この種のシラバス作成の動向が持つ意義を推論して、英語教育における社会言語学の役割を明確にしたい。

I 社会言語学の応用と範囲

「応用」には「何を」「いかに」応用するかの2つの事柄が含まれている。つまり、応用する「物」と「方法」である。社会言語学の応用は、従って、社会言語学とは何か、また、その応用方法とは何かという間に満足のゆく答えをせねばならない。しかし、Brown (3: 1) が指摘するように、言語学の定義すら困難な現状であり、言語学の応用は「言語科学の洞察、方法、発見を教育機関における言語習得の問題に応用すること」(Ferguson 6: 135) と、包括的に述べるだけである。

社会言語学の定義は、Bright (2: 11-15) を始め、多数の研究者が試みているが、言語学の定義と同様、一致した見解は見い出せない。しかし、Hymes (11: 324) が強調する言語学との性格上の相異点、例えば、言語の langue に対する parole の重視、言語の機能的追求、文化の型を成す活動としての speech 観、communicative competence の解明など、が応用を考える際に重要な意味を持つ。

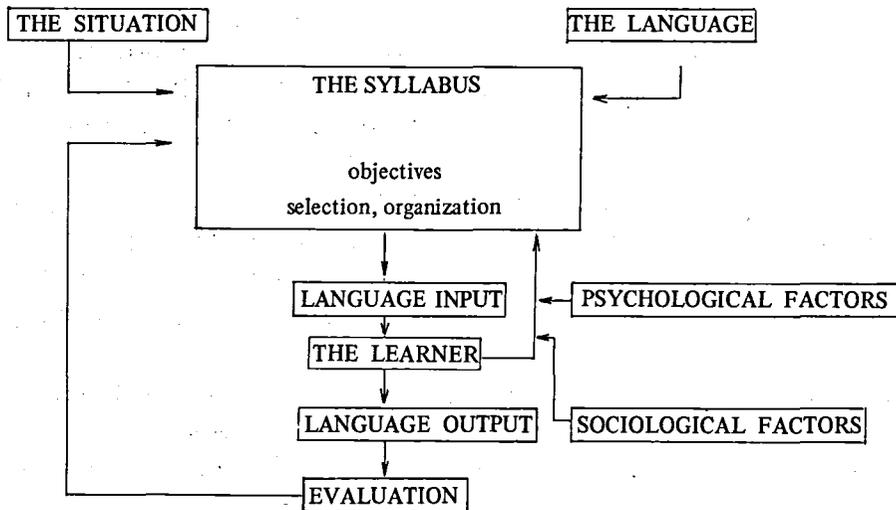
応用方法に関しては、Spolsky (18: 149) が提案する implication と application の区分と、さらに、micro と macro とのレベルの区分を考えたい。implication とは、あるテーゼから引き出される意味であって、社会言語学の言語観とか、言語に対する基本的な研究態度から、間接的に英語教育に与えられる種々の示唆である。「音声言語であれ、文字言語であれ、人間は常に言語を使用している存在であり、社会から規定された行動規範を共有して、他の人間と結びついている」(Fishman 7: 1), 「言語は単に内容を伝達するための媒体に留まらず、敬意、好意、社会的地位、人間関係を示し、場面や話題の指標でもある」(ibid: 4) などの言語に対する認識は、言語構造の理解に終始しがちな英語教育に反省を促し、言語使用の多様な側面を充分考慮しない限り、英語使用能力の養成という英語教育の本来の目的は達成が不可能である点を示唆していると言える。

一方、 application は社会言語学が上述の態度で言語使用の諸相を記述する際に用いる概念、記述の単位、モデル、あるいは記述の成果、などを教授・学習に援用、導入することであり、 implication より、英語教育と直接的な結びつきを有している。言語変種の記述結果を教材の選択、編成に用いる Chiu (4: 51-68) , 教材分析に記述の単位やカテゴリーを導入する Levine (13: 107-133) , コミュニケーションを志向する教授・学習過程を社会言語学のモデルから構築する西田 (15: 76-86) などは、 application である。

社会言語学では、言語と社会の構造体を記述する場合に、言語構造に重点を置く micro レベルと、社会構造を重視する macro レベルの二層を便宜上設定する。このいずれのレベルと関わる度合いが強いかによっても応用研究の内容は異なる。言語政策 (language policy) や言語計画 (language planning) は、 macro レベルの応用であり、教材、教授法、シラバス作成は、 micro レベルでの導入である。

II 英語教育におけるシラバス

syllabus の訳語は教授細目 (小学館ランダムハウス英和大辞典) である。その内容は Page and Thomas (16: 332) によれば、「コースの要点を簡略に記述したもの」また Good (8: 578) に従えば、「指導要領 (a course of study) の要点を概略述べたもの」である。しかし、訳語からも、前述の定義からも、シラバスの内容は明確でない。また、英語教授・学習の全体像の中で占めるシラバスの位置と機能についても説明が不十分である。ここでは、White (21: 40) の下記の図を参照してシラバスの内容を考える。



学習者は自分の環境で、ある言語を対象にして学習する。学習者には社会的かつ心理的特性が具わっている。シラバスは、対象言語、学習者の要因、学習環境を考慮して、学習の目標 (objective) を設定し、学習対象言語の中から必要な学習項目を選択し (select) , それを配列

(organize) する。シラバスの内容は「学習目標、学習項目の選択と配列を示したもの」である。このような内容を持つシラバスは、教科書、練習用教材など具体的な形に肉付けされて、学習者に与えられる。

Ⅲ シラバスの構成と内容

i 全般的考察

最近試みられているシラバス作成研究を個別に考察する前に各シラバスの構成と内容に共通する基本的な考え方から検討に入る。

シラバス作成は決して新しい教育上の試みではない (cf. Hill; 10: 115-118)。しかし、その作成方針は the Council of Europe を中心とする先覚的かつ指導的な研究によって、変更されつつある。Currie (5: 339-354) によれば the Council of Europe は、シラバス作成の第1原則を言語の使用目的に置く。シラバスの出発点は、学習者の持つ使用目的を細部にわたって、明確にすることである。従来学習項目の選択と配列の規準は、言語の頻度 (frequency), 範囲 (range), 単純性 (simplicity) など純言語的尺度を拠り所としていたが、新しいシラバスでは、言語使用の目的が最優先される。

第2の原則は、言語の機能と観念 (notions) をシラバスの中核にする点である。言語の機能的研究に関して、Halliday (9: 7) は、言語の機能と使用目的の関係は外見ほど単純ではないが、言語の機能的研究は言語がいかなる目的で使用されているかを調査することから始まると述べている。言語機能は、言語の macro と micro の両面で観察できる。前者には、情的機能 (emotive function), 言語交際の機能 (phatic function), 文脈的機能 (contextual function) など (Jakobson; 12: 350-377), 道具的機能 (instrumental function), 規定的機能 (regulatory function), 想像的機能 (imaginative function) など (Halliday; 9: 9-20), encounter regulation, meta-language function など (Robinson; 17: 50-51), 6~14の機能が含まれている。

シラバス作成には、このような macro 面にみられる機能も一部採用されるが、言語機能の中心は、Austin (1) に代表される micro functions of language である。周知の如く、彼は発話の機能を表現行為 (locutionary act), 表現内行為 (illocutionary act), 表現遂行的行為 (perlocutionary act) に分け、発話行為の中心は表現内行為であるとした。この行為によって約束、要請、断定、評価などの言語機能が成立する。

言語の観念 (notions) は、言語機能に不可欠な存在である。言語がある目的遂行のために機能するには、常に、時間、空間、質、量などのいろいろな観念に言及したり、操作する必要がある。

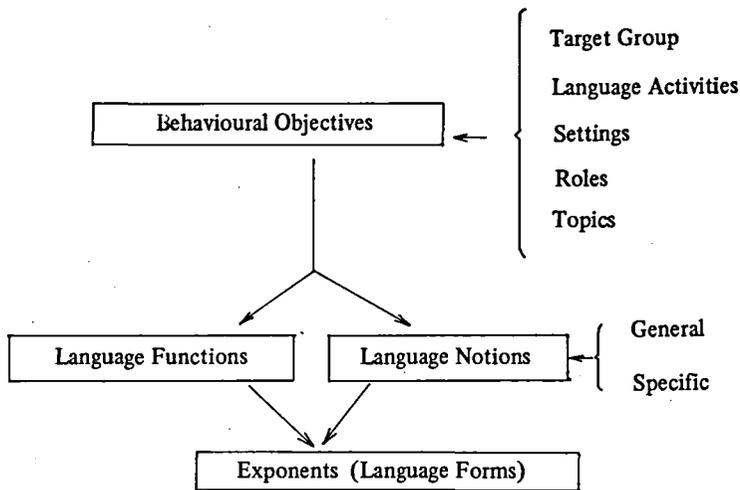
第3の原則は、言語形式よりも発話の意味を重視することである。シラバス作成の出発点が言語使用の目的の明確化であり、機能と観念をシラバス構成の2大柱にする考えからも当然ではあるが、従来の言語構造、文型、などは二次の意味しか持たない。

ii 個別的考察

① van Ek (1977)

ヨーロッパの成人を対象とした入門用シラバスである。学習者の多彩な背景を考慮し、外国語の運用技能を重視する。このシラバス作成の過程を図示すれば次の頁ようになる。

外国語の実用価値を強調する立場から、目標は学習目標より広範囲な行動目標 (behavioural objectives) とする。この目標は学習者集団 (target group), 聞く, 話すなどの言語活動



(language activities) , 言語使用の場 (settings), 対人的役割 (roles) , 話題 (topics) の諸特性から限定する。次に, 行動目標を達成する言語の機能と観念を選定し, 最終的には, 両者を具現化した言語形式 (exponents) を選択する。観念は, すべての話題に必要な観念 (general notions) と, ある特定な話題に言及する際に用いる特殊な観念 (specific notions) に区分する。以下, 言語機能と観念との構成及び選択された形式をそれぞれ一部列挙する。

General Functions

1. Imparting and seeking factual information

- 1.1. identifying
- 1.2. reporting
- 1.3. correcting
- 1.4. asking

2. Expressing and finding out intellectual attitudes

⋮

6. Socializing

demonstrative pronouns: *this, that, these, those + BE + NP (P)*: demonstrative adjectives: *this, that, these, those + N + BE + NP (P)*, etc.

General Notions

1. Existential

- 1.1. existence, non-existence; *there is . . . : there's no . . . : is there . . . ? exist (P): make (P)* etc.
- 1.2. presence, absence: *here (P): not here (P): away (P)* etc.
- 1.3. availability, non-availability: *have/have got (P): there is . . . (P) there's no . . . (P): is there . . . ? (P)* etc.
- 1.4. possibility, impossibility: *possible, impossible, can, cannot (P)* etc.
- 1.5. occurrence, non-occurrence: *happen (P)*
- 1.6. demonstration: *show (P) Please show me another one.* etc.

2. Spatial

3. Temporal

⋮

8. Deixis

Specific Notions

1. Personal identification	}	1.1. name
2. House and home		name; name (P) <i>What's your name?</i> forename: first name (P)
3. Life at home		<i>His first name is Charles;</i> etc.
⋮		
⋮		
14. Weather		1.2. address
		⋮
		⋮
		1.15 character, temperament, disposition

言語機能は①事実の伝達と尋問②知的態度の表現と発見、以下社会化まで6つの機能から成立する。①は確認、報告、訂正、質問の機能に下位区分される。一般観念は、存在、空間、時間、以下指示まで8範ちゅうであり、存在は、さらに6つに区分されている。一方、特殊観念には、身分証明、家庭、家庭生活など14の観念が含まれる。なお、斜字体の部分は、選択された言語形式である。

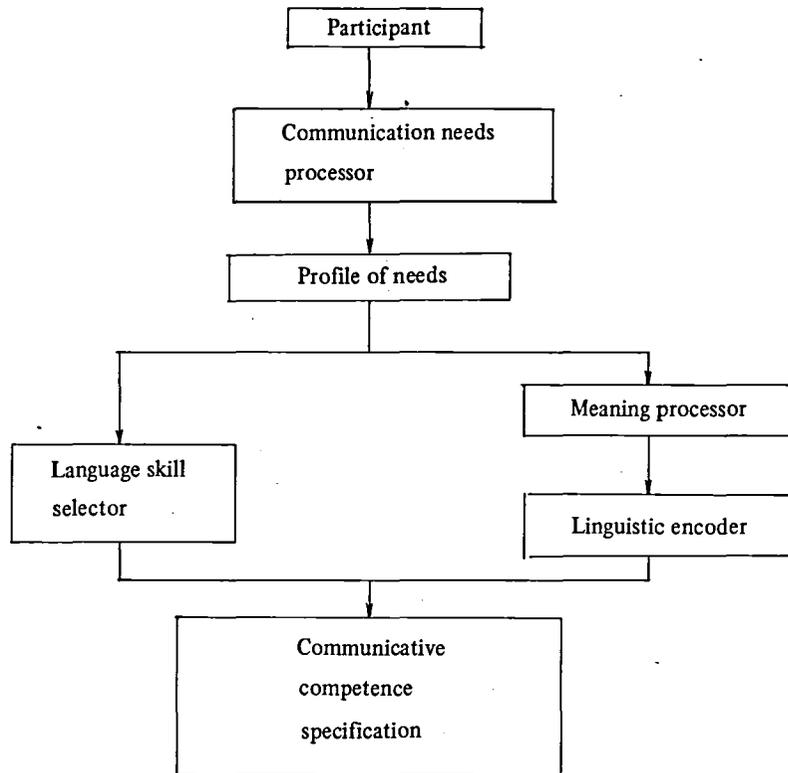
② Wilkins (1976)

彼の提唱する notional syllabus についてはすでに田中(19:38-41)が紹介している。本論では、前述の van Ek と比較する必要上、その構成の枠組だけ再録する。Wilkins はシラバス作成に当って、①意味的文法的範ちゅう (semantico-grammatical categories) ②法的意味範ちゅう (categories of modal meaning) ③伝達機能範ちゅう (categories of communicative functions) の3部門を設定する。①は時間、量、空間、指示などに関する意味的文法事項、②は法助動詞であり、両者は、Van Ek の一般観念にほぼ相当する。③は判断、評価、説得、議論、個人的感情などの言語機能である。言語機能に関しては、van Ek と区分の差は多少あるが、ほとんど内容は同一である。なお、Wilkins には特殊観念のような発話の場面はシラバスの対象となっていない。

③ Munby (1978)

van Ek, Wilkins 同様、言語使用を中心とするシラバス研究であるが、次の点にその特徴がある。彼の研究は、ESP (English for Specific Purposes) を教えるための communicative syllabus design であり、前述の2例以上に、学習目的と学習者の needs に合う communicative competence をいかに明確に限定するかという問題に解決の指針を与える。彼は次の頁のようなモデルを提示している。

このモデルは理論的な枠組として①社会文化的志向 (sociocultural orientation) ②言語知識に関する社会意味論的基礎 (sociosemantic basis of linguistic knowledge) ③談話レベルでの言語操作 (discourse level of operation) の要素を持っている。①は、heterogeneous な言語社会を念頭に置き、発話の脈絡上の適切さ (contextual appropriacy)、言語の社会的機能、学習者の伝達 needs、などを強調する。②は Halliday(9) にみられる semantic options



としての言語観に立ち、学習者の求める意味範ちゅうと観念範ちゅうを設定し、学習のための言語形式を選択するプロセスを示す。③は文から談話レベルの視点の移動であり、発話機能や rhetorical acts などの価値を伝達の立場から再認識することを要求する。

Ⅳ シラバス研究の意義と問題点

- ① notional syllabus や communicative syllabus を生み出したヨーロッパと我国では外国語教育の背景が異なる。単に言語環境のみならず、教育制度上の差もある。日本には、文部省の学習指導要領があり、全般的な目標、各学年の目標をそれぞれ設定し、言語材料を音声、文、文型、文法事項、語い、に亘って挙げている。従って、指導要領はすでにシラバスの機能を具えている。指導要領が現存し、効力を持つ限り、シラバス研究は無意味であろうか。しかし、指導要領は目標、内容、言語材料を大まかに設定したガイドラインであると考えられるので、学習者の特性を把握し、目標をさらに明確にして、言語材料を精選する仕事は教師に任されている。その際にシラバス作成は重要な教育手段となる。
- ② 言語と機能を形式に優先させる新しいシラバスは、言語の一般的な知識や技能を習得する段階よりも、それ以後の目的が細分化し強い目的意識を持つ段階で一層有効であろう。大学レベルの英語教育ではシラバス研究を開発し、多様な教育を実践する必要があると思われる。学習目的が明確化できればコース別の英語教育も実施できるであろう。
- ③ 前述のシラバス研究において示された観念と機能は、学習負担の視点から再検討する余地がある。特に言語機能は、van Ek の例でも理解できるように、下位区分の機能は相当な数で、それを一つ一つ学習するのであれば、学習の負担は決して軽くない。situational approach の欠陥

を補う意図で機能が提案されているわけであるが、伝達の効果を考えながら、学習する言語機能はもっと精選すべきではないだろうか。

結 論

本論では社会言語学の応用がシラバス作成研究の中でいかに試みられているかを検討した。社会言語学の応用はシラバスにおいて体系化しつつあるように思われる。

References

1. Austin, J.A. (1962) *How to Do Things with Words* (Clarendon Press)
2. Bright, W. (1971) "Introduction: the dimension of sociolinguistics," Bright, W. (ed.) *Sociolinguistics* (Mouton) pp. 11-15.
3. Brown, H.D. (1976) "What is applied linguistics?" Wardhaugh, R. and H.D. Brown (eds.) *A Survey of Applied Linguistics* (The University of Michigan Press) pp. 1-7.
4. Chiu, R.K. (1973) "Measuring register characteristics," *IRAL* 11, 1, pp. 51-68.
5. Currie, W.B. "European syllabuses in English as a foreign language," *LL* 25, 2, pp. 339-354.
6. Ferguson, C.A. (1971) "Applied linguistics," Ferguson, C.A. *Language Structure and Language Use* (Stanford University Press) pp. 135-147
7. Fishman, J.A. (1972) *The Sociolinguistics of Language: an interdisciplinary social science approach to language in society* (Newbury House Publishers)
8. Good, C.V. (1973) *Dictionary of Education* (McGraw-Hill)
9. Halliday, M.A.K. (1973) *Explorations in the Functions of Language* (Edward Arnold)
10. Hill, L.A. (1967) "Structural syllabuses and contextual syllabuses," Hill, L.A. *Selected Articles on the Teaching of English as a Foreign Language* (Oxford University Press) pp. 115-118.
11. Hymes, D. (1972) "The scope of sociolinguistics," Shuy, R.W. (ed.) *Monograph Series on Languages and Linguistics* No. 25 (Georgetown University Press) pp. 313-333
12. Jakobson, R. (1960) "Closing statement: linguistics and poetics," Sebeok, T.A. (ed.) *Style in Language* (M.I.T. Press) pp. 350-377
13. Levine, J. (1976) "Some socio-linguistic parameters for analysis of language-learning materials," *IRAL* 14, 2, pp. 107-133
14. Munby, J. (1978) *Communicative Syllabus Design: a sociolinguistic model for defining the content of purpose-specific language programmes* (Cambridge University Press)
15. 西田 正 (1974) 「英語教育学研究における心理言語学と社会言語学の位置づけについて—コミュニケーションプラクティスとの関連で—」『新潟大学教養部研究紀要』第5集 pp.76—86
16. Page, G.T. and J.B. Thomas (1977) *International Dictionary of Education* (Kogan Page)
17. Robinson, W.P. (1972) *Language and Social Behaviour* (Penguin Education)
18. Spolsky, B. (1969) "Linguistics and language pedagogy — applications or implications?" Alatis, J.E. (ed.) *Monograph Series on Language and Linguistics* No. 22 (Georgetown University Press) pp. 143-155
19. 田中春美 (1979) 「伝達内容の言語機能に基づく教授計画 — D.A. Wilkins の Notional Syllabus 案 —」『英語教育』(大修館) 28, 3, pp.38—41
20. van Ek, J.A. (1977) *The Threshold Level for Modern Language Learning in Schools* (Longman)
21. White, R.V. (1975) "The language, the learner and the syllabus," *RELCJ* 6, 1, pp. 31-52
22. Wilkins, D.A. (1976) *Notional Syllabuses: a taxonomy and its relevance to foreign language curriculum development* (Oxford University Press)